

# 近世近代移行期の天草郡における村明細史料と地域情報

東 昇

## はじめに

本稿では、天草郡における慶応四〜明治二年（一八六八〜一八六九）の近世から近代の移行期に焦点をあて、この時期の短期間で交替する支配担当者による調査指示や村明細史料の作成過程から、把握された村の地域情報についてあきらかにしたい。筆者はすでに天草郡の地域情報把握について、庄屋日記を中心史料として村レベルの各種事例を分析している<sup>(1)</sup>。

ここでいう村明細史料とは、村明細帳が代表的だが、各村別の石高、人口、家数をはじめ、田畑面積、寺社、牛馬、船、農閑稼、津出し、各地への距離、普請所など、村の村勢、生業、交通に関する数値をもとにした情報の集成である。これらを近世の地誌や明治期の郡村誌と同じく、郡・国など一定規模を持つ行政単位全体を把握する史料を対象としている<sup>(2)</sup>。筆者はこれまで一国単位の通時的な村明細史料の編纂過程を、近世近代の対馬国を対象として分析した<sup>(3)</sup>。

村明細史料の基礎となる各村の村明細帳・村鑑帳を対象とした研究では、野村兼太郎が全国的、通時的な視点で一八二村分を集成してい

る<sup>(4)</sup>。村明細帳は、村の状況が詳細に判明するため、自治体史などで数多く利用され、石高や山林など特定の項目に限定し、特定地域の比較研究で用いられる場合が多い。そのなかで、一定地域の数量統計分析による研究として、宮本又郎の近世豊中市域を対象として、村落規模や石盛などの経済状況を明らかにしたものがある<sup>(5)</sup>。また渡邊英明は近世北武蔵の六二四点（三一〇村）の村明細帳を対象とし、近世の市場網について分析している<sup>(6)</sup>。このような研究は、特定地域を対象とした地誌類でも可能である。一国・一藩規模の地誌分析では、溝口常俊の隠岐国や尾張国全体の石高や産物、生業や景観についての研究がある<sup>(7)</sup>。

このように村明細史料・地誌は、近世史、経済史、歴史地理学で研究が進められてきたが、地誌の作成目的や成立背景については、白井哲哉の近世地誌の記述様式や編纂過程を対象とした研究がある<sup>(8)</sup>。また本稿の視点に近い、一定期間における村明細帳の差出と支配の交替については、鈴木一哉が幕府領上野国三波川村の村明細帳の差出についてまとめている<sup>(9)</sup>。

これまで天草郡の村明細史料については、中村正夫が赤崎村の明細帳群を通時的に分析している<sup>(10)</sup>。中村は、元禄四年（一六九一）「明細帳」

から慶応四年「風土行事書上帳」までの一七点について、翻刻と各明細帳の作成時期、目的、動機をまとめた。また野村の『村明細帳の研究』を参照し、赤崎村の明細帳は、既知のものでは最も古く一村あたりの現存数も最も多いとする。

このような村明細帳、地誌、天草郡に関する研究を受け、本稿では、1 慶応三年の郡会所焼き払いによる文書焼失を受け、薩摩・熊本藩・福岡県など支配担当者の文書行政の復旧、村方情報の調査指示、2 慶応四年八月に指示された「風土行事書上帳」の作成の過程と村の意識の比較、3 明治初期の天草郡の村明細史料「肥後国天草五ヶ庄村高戸口取調」「肥後国天草郡八代郡村鑑帳」の作成過程と内容を概観する。

なお、前提となる近世の天草郡全体の村明細史料は、翻刻されている元禄四年「天草島中人高帳」<sup>11)</sup>、文政一〇年（一八二七）「文政十亥分午迄式十箇年定免以下村々同」<sup>12)</sup>「天草近代年譜」に「郡中村々戸口一覽」<sup>13)</sup>として、天保二年（一八三一）、万延元年（一八六〇）が知られている。元禄四年以外の史料は、すべて一九世紀前中期であり、項目も石高・人数・男女数・家数に限られる。3で紹介する明治初期の「肥後国天草五ヶ庄村高戸口取調」「肥後国天草郡八代郡村鑑帳」は、明治元年、二年にかけて、長崎府・長崎県で作成された史料で、これまで存在が知られていなかった。近世近代移行期の詳細な内容の史料であり、活用範囲は広い。

## 1 慶応三、四年の郡会所焼き払いと調査

### 1-1 慶応・明治の領主変遷と触の種類

天草郡は、一七世紀後半以降幕府領であり、天草・長崎代官、日田郡代支配、島原藩預所、長崎代官を経て、弘化四年（一八四七）以降は日田郡代支配であった。慶応三年（一八六七）末からの混乱に乗り、浪士追討の薩摩藩、異国船警衛に出動していた熊本藩が対立し、前後して支配した。その後、慶応四年閏四月福岡県、六月天草県と改称し、八月長崎府に統合された。明治二年（一八六九）六月長崎府は長崎県と改称、明治四年一月長崎県から八代県に移管されて、同六年一月白川県（後の熊本県）に所属した。

頻繁に交替する支配側の各種調査の分析には、各村に出された触や口達が重要である。ここでは、本戸組大庄屋木山家文書「御用触写帳」の触からみていきたい。触を扱う際に注意すべきことは、対象範囲が天草郡、長崎府、全国いずれかということである。この時期は新政府と旧幕府勢力にわかれ、東国諸藩は奥羽越列藩同盟を結ぶなど諸勢力が存在し国内一様ではない。そのため天草郡と同じく、明治元年に京都府となった京都市中の触と比較して判断したい。

例えば五月一六日に出された、諸株旧来の通り建置・宮堂上方諸侯小吏陪臣など通行の節不法の振舞禁止・才芸拔群行状よろしき者の採用・在町苗字帯刀免許の由緒申出・諸色諸職人手間賃など引き下げの達書五通の場合、添文として「右之通従京都表被仰出候旨、長崎表二おゐて被仰出候間、得其意郡中不洩様可相触候」とあり、京都発、長

崎経由の触と判断できる<sup>15)</sup>。また五月二二日に出された、閏四月の古今通用金銀銅銭定価については、作成が太政官であり、これも京都から全国への触である<sup>16)</sup>。そして、五月一四日の大政御一新による明治天皇元服の大礼大赦のため、前々追放・所払いの者届出は、前述の京都や太政官などの文言はないが、内容から新政府発の触と推測できる<sup>17)</sup>。五月二〇日の陣屋前の目安箱設置については、文言もなく判断しがたいが、二月二六日京都三条大橋付近、三月七日堀川竹屋町橋に目安箱を設置していることから、新政府発と考えられる<sup>19)</sup>。

## 1―2 郡会所焼き払いと年貢書類の復旧

天草郡の郡会所は富岡に置かれ、大庄屋・庄屋が交代で詰め、近世郡政の中心として陣屋役人とともに行政を担っていた。慶応三年二月六日、浪人体の者一〇人ほどが富岡陣屋に押し入り、郡会所を焼き払う事件が発生した。この件を急報した文書は三件あり、会所詰出掛り役人中から本戸・砥岐組大庄屋・庄屋衆中宛には「今晩八ツ時頃浪人体之もの多人数押寄砲発いたし、御年貢金押領いたし候上、郡会所へ火をかけ立去り、会所者丸焼二而書類共外聊も残りもの無御座候<sup>20)</sup>」とある。浪人は年貢銀を横領し、会所が焼けて書類が全焼している。その他の情報からまとめると、防衛側の役人や農兵も負傷し犯人は行方不明、そのため各村の農兵も鉄砲を持参の上で召集されている。

二月二五日には、会所にあった諸帳面の復元、行政再建のための触が出て<sup>21)</sup>いる。

態与急飛脚を以得御意候、然ハ此度会所出火ニ付諸帳面一切消失および難法不少候処、差当諸割賦取立方差支罷在候間、村々へ下渡置候受取書差出相成候様御取計可被下候もの、是迄持込不足之村々も有之候処、是又急速持込方御取計可被成候、右申進度早々已上

十二月十五日 会所詰大庄屋

木山為彦殿

会所の出火で諸帳面が焼失し難渋しているので、村々に下付された諸割賦請取書を会所へ差し出すよう指示している。同様の触は翌年二月二六日にも出されている<sup>22)</sup>。

右者旧隴会所出火ニ付書類一切焼失、諸割賦出銭取立方差支候ニ付、村々へ相渡置候廉々請取書与引合勘定いたし度、其段追々引合候得とも書面村々今以差出無之差支罷在候間、乍御面倒右村々へ御引合廉々請取書急速持参相成候様御取計可被下候、為其得御意度早々以上

二月廿六日 会所詰大庄屋

木山為彦殿

新政府と旧幕府の政権交代の影響もあり、二ヶ月の間、文書が不完全な行政停滞状況が続いていた。翌二月二七日頃と考えられる、薩州陣営から遠見番・山方役・大庄屋・年寄・庄屋他役人に宛てられた「口

達覚」には、九州新鎮台沢主水頭が長崎に下向したので、郡中の人心を確定（安堵）するよう指示が出た。<sup>23</sup> この文書の冒頭には、「郡中之証書其外租税田畑等之要帳面旁之儀者、具ニ朝廷江奏上いたし置候」とある。行政の基礎となり得る証書や租税・田畑などの重要な帳面を朝廷へ奏上するので提出するようにとあり、薩摩藩の実効支配を確立するための措置とも考えられる。

しかし二月二九日には、肥後警衛所が大庄屋・庄屋を集め、朝廷の判断として郡中は御領（御料）となり、三月に入ると熊本藩が取り締まることを通達した。<sup>24</sup> そして三月四日には、年貢残穀高帳の調査、三月一六日は各村の検地帳の提出が指示される。<sup>25</sup> 役所に保管されていた検地帳は散乱したので、村の控を清長（帳）紙に写し二八日までに出すようにとある。また清長紙は、富岡町では入手できないので長崎へ購入に向かわせており、その代金受け渡しについても記している。

### 1-3 支配担当者の調査

三月後半以降、村に保管された文書の提出ではなく、新たな調査を命じている。三月二四日には、塩浜の面積や運上銀（金額や年季）、医師姓名、漁船・買船数、酒造高（株高・持主名）などの調査指示があった。<sup>26</sup> 医師や船数は、当時江戸や各地に進軍していた新政府軍の支援などに関係する可能性がある。

つぎに四月以降、高齢者や孤独、孝子などの人を把握する調査が増加する。まず四月一五日当年九〇歳以上の高齢者を調査、五月一四日には提出した組内九〇歳以上の者八人の職業や家内人数などの追加調

査の指示が出た。<sup>27</sup> 七月二二日八八歳以上に変更となり、八月一三日には提出した八八歳以上一七人の者へ褒賞が出るので二〇日までに出頭のこととある。<sup>28</sup> これらの高齢者には、一〇月二一日老養扶持米を一年一人三石八斗三升を支給するので、至急受取証文を提出するよう指示があった。<sup>29</sup>

七月二四日には、鰥寡孤独や盲人・瞽女・孝子・節婦・奇特者、追加で座頭などの調査が指示された。<sup>30</sup> 鰥寡孤独には「類縁身寄等更二無之独りもの之由」と説明が付されており、これまでの天草郡の触にはない新しい言葉、概念であったと考えられる。ちなみに九〇歳以上の調査は、文化一四年（一八一七）にも実施されており、四月二三日の触に春以来何度も問い合わせているとある。<sup>31</sup> 名前や続柄の他、若年より正路貞実・農業出精か、達者で手稼ぎしているか・打ち伏せているか、家内の忤・孫人数、所持石高、近隣と睦まじいかどうか詳細に記すよう指示が出ている。

同様の触は京都でも出されており、四月一日町触で府下百姓・町人のうち、孝子・節婦と七〇歳以上の届け出を指示し、七月一〇日には、府が明治天皇還幸の土産として、洛中洛外の七〇歳以上に金子を下賜している。<sup>32</sup> 一月一〇日鰥寡孤独・廃疾の窮民の救恤は、町年寄・庄屋・年寄などが調査し府へ届け出るよう指示した。いずれも天草郡と月日が前後し内容の組み合わせも相違するが同内容の触が出ており、同様の政策が実施された可能性がある。

閏四月五日には、長崎裁判所附御領所取調役吉井源馬他が富岡に出張するので、村々庄屋が召喚され、同時に村文書の提出が指示された。<sup>33</sup>



その文書は、まず卯年（慶応三）分の年貢などに関わる、割付・皆済目録・仮免状・家数人数一村限帳・小物成増減書付・御年貢米銀辻書付・諸石代直段書付の七点、その他、年指定のない留林、諸拝借返納、貯石、作夫食関係四点、また村や郡全体に関わる村明細帳・村名帳・天草郡惣絵図・村役人名前帳四点、計一五点である。これまでの眼前の年貢収納に限定した文書に比べて、大量の文書提出が指示されており、本格的な支配に向けての準備であったと思われる。

閏四月八日には、京都からの触として、元代官支配地へ長崎裁判所附属判事が巡村するので石高・地図を立会吟味するよう、また諸国私領寺社領、幕府領預所などへ、村高帳・昨年の取箇帳・郷帳、村鑑帳の提出指示が出ている。五日の触に比べると、提出文書の数は少ないが、全国的にも同様の措置が執られている。また閏四月一日京都からの触として、神祇官再興、神仏分離に伴う神社由緒書の提出が命じられた。<sup>83</sup>

これら調査指示によって提出されたのが、慶応四年閏四月赤崎村「明細帳」である。<sup>86</sup> 神社が最初に記され、建物・除地・祭礼のつぎに社人について詳しく記される。神社由緒書の指示の影響と考えられる。その後、村役人給、家・牛馬数、古城・名所・旧跡、高札・島・作間稼、波除・潮除の普請場など、ほとんどが近世の村明細帳の内容を踏襲している。

閏四月二五日富岡県となり、五月二五日知県事として佐佐木三四郎（高行）が就任し、六月一二日天草へ着任、七月二日には「村鑑帳等、夫々受取封印致候」とあり、上記の文書を受け取ったことが分かる。<sup>87</sup> 六月

一〇日には、天草県と改称し、長崎裁判所も長崎府となる。その後も同様の調査が続き、五月一日には、村々の家数・人数人別と牛馬数を大庄屋各組惣寄目録にまとめ、卯年の村入用を調査し、村三役人の名前と印鑑帳の提出の指示があった。<sup>88</sup> これらは、各村で新たに調査後に差し出すとあるが、おそらく村方において作成されてきた文書があり、それらを基に提出したと考えられる。

八月一〇日村人の夫食不足品の内、村で購入している米・麦・大豆・小豆・粟・塩の年間の買入高について、肥後・柳川・肥前・島原各地からの数量を記入し、一三日までに調査するよう指示が出ている。その調査文書にあたるのが、高浜村の慶応四年「村方萬覚帳」の「辰八月船宿分届来高、一他国分買入穀類凡高之事」である。<sup>89</sup> ここでは、船宿へ水揚げする肥後米五石五斗をはじめ肥前米・肥後麦・肥後大豆・上方塩、船より積み越す肥後米五〇石をはじめ肥前米・肥後麦・大豆・小豆・元豆・上方塩の石高が列挙されており、この情報が集約され提出されたと考えられる。

## 2 「風土行事書上帳」の作成と比較

### 2-1 「風土行事書上帳」の作成指示

前章でみたように、慶応三年（一八六七）末の郡会所焼き払いから、支配担当者の交替に伴う各種の文書の提出、調査の指示のなかで、最も村の地域情報を把握したものが「風土行事書上帳」である。「風土行事書上帳」は、郡内全村分は残っておらず、現在、高浜・下河内・

赤崎・福連木・楠浦・本泉の六村が確認できる。<sup>(41)</sup>

八月二三日、村々神祭仕様他について、九月一五日までに提出するよう、つぎの触が出された。<sup>(42)</sup>

(表紙)

「風土行事書上帳

何村」

一 神祭仕様之事

一本田畑古新田ノ切新田切替畑地高之事

上中下

但物成高共

旱水損

一 人員高之事

男

女 幾人

田地持 同

但小作 同

網持 同

船持 同

出稼者 同

一村方風俗之事

一村法之事

一作間渡世之事

一 御林有無之事

一 産物之事

一 牛馬員数之事

一 船員数之事

但大小船漁船等夫々差別致すへし

一 諸運上品之事

一 極難渋者之事

一 痼疾者之事

一 公事出入之事

但陣屋へ訴状差出候廉、又ハ村役人取扱中之廉

一 普請場之事

一 神社寺院員数之事

一 鉄砲員数之事

ノ

御書下写

郡中村々神祭仕様、其外共別紙雛形之通精々取調、来九月十五日限無相違可申出候事

辰八月

別紙之通雛形御添順々早々可継立候旨、只今御書下相成候間即刻村継を以差廻候間、無昼夜刻付を以御継立可被成候、右添書如斯二候、早々以上

八月廿三日酉ノ下刻 会所詰大庄屋  
志岐組始順々本戸組迄

大庄屋庄屋衆中

右者一月廿三日夜亥ノ刻頃本村々繼来候ニ付、即刻写取町山口へ  
繼立ル

この触は、内容からみて京都・長崎府発ではなく、天草県独自と考えられる。一つ書きで一七項目、田畑や人員は小項目を設定し、これまでに指示のあった村明細帳、村鑑帳とほぼ同種である。直前で現存する天保九年（一八三八）四月高浜村「明細帳」と比較すると、高浜村「風土行事書上帳」では、神祭仕様・村方風俗・村法・普請場が文章形式、極難渋者・廢疾者・公事出入が簡条書形式で追加されている。文章形式の部分は、例えば村方風俗の七夕の場合、つぎのように記述している。<sup>44</sup>

七月六日手習子供ハ前以相習候七夕之詩歌を五色紙之短冊ニ書、  
右竹ニく、りつけ師宅へ相建、又添竹とて小竹を建添、女子供ハ  
衣服之形を紙ニ切下ケ申候、扱机を重而素麵・西瓜・神酒・果類・  
早稲・蓬之花等備、夜分も打寄通夜仕り相休申候  
七月七日七夕節句と唱、重立者ハ神棚へ神酒・洗米等相備社参、  
相互ニ節句礼致合申候、小前之者共ハ此日ハ手習子供斗り之節句  
と心得候者勝ニ御座候、手習子供ハ酒肴等師匠宅へ持寄、昼夜ニ  
披露仕申候、尤昨夜持寄候者も御座候

当時の高浜村における七夕の六・七日の準備から、行事の内容など詳しく記している。普請場の場合、川除溜除堤などの構築物の種類と

場所が記された後、「右御普請所四拾五ヶ所之儀、御普請所明細帳ニ有之候場所ニ付、洪水ニ而及大破百姓力ニ難相叶節ハ、奉願御入用を以御普請被仰付候場所ニ御座候」とある。続いて現在までの普請場の破損と修繕の経緯を記す。

## 2-2 高浜村の「風土行事書上帳」の情報収集

つぎに「風土行事書上帳」が村でどのように情報収集し集約されたか、高浜村の事例から分析する。まず「神祭仕様之事」は下書きと思われ、各所に追加・削除が施される。<sup>45</sup>追加には「神主年寄百姓代立合之上」「氏子重立候者」などの参加者、「但大紋付襦袢前かけ脚半仕」「鳥居より拝殿江御着迄之間一同腰をかゝむ」などの儀礼の詳細が付加される。一方の削除は、各迫社の祭礼、「二月廿四日宇内塾迫鎮守愛宕社祭礼、右同断」「六月十五日宇内塾迫鎮守祇園社祭礼、右同断」と迫名と鎮守の文字が消されている。

数値情報の調査文書として、慶応四年辰九月「廉々取調子帳」には出稼者として、迫・名前・続柄が列挙される。<sup>46</sup>これは長崎奉公稼三八人とあることから、「風土行事書上帳」出稼者五八人の一部と考えられる。また各種文書が綴られた一件文書には、迫別・組別の牛馬所有者名・頭数、迫社の神田の字名・粃高、鉄砲所有者・病人・困窮者・極難渋者・出稼・長崎日用稼者・田畑小作人・粃下作人の迫・名前・続柄を記した文書がある。<sup>47</sup>これも「風土行事書上帳」の牛馬数・鉄砲数・極難渋者・廢疾者・出稼者・小作などに該当し、調査文書であった。

また神祭・村方風俗・村法や産物など詳しく記され、田畑高・牛馬

数など数字部分が空欄の文書がある。<sup>(48)</sup>これは、枝郷山浦・内ノ原、氏神八幡宮、無量寺、正覚寺の記述から同郡内の久玉村の内容である。記載内容の参考、調整のために、高浜村上田家が入手したと考えられる。

## 2-3 各村の神祭・風俗・村法認識

現存する高浜・下河内・赤崎・福連木・楠浦・本泉の六村の「風土行事書上帳」を比較すると、同じ行事でも村によって村方風俗や村法と違う項目に分類されており、作成段階における意識の違いをみることが出来る。

これまでに筆者が分析した虫追は、寛政から文化期の高浜村庄屋上田宜珍の日記に村行事として頻出していた。<sup>(49)</sup>虫追は、福連木以外の五村に記載があり、高浜・赤崎は村方風俗、楠浦・本泉・下河内は村法に分類される。いずれも氏神に参詣し祈禱を行い、空砲を放ち田をめぐり、高浜以外は五月に実施と明記している。記載の少ない本泉以外は、祈禱後に幟を立て、海や村境に虫を送る点も共通する。また赤崎・楠浦・下河内では、虫追前後の祈禱や秋の稲刈り後の願い成就祝、祈禱の際の子供手踊通物、傀儡角力、歌舞妓操などの奉納についても言及されている。

つぎに正月一日の帳祝は、村や商人の帳簿を仕立てる年始の事始めの一つである。福連木・赤崎以外の四村、高浜・本泉は村方風俗、楠浦は村法、下河内は両方の記載がある。共通点は、いずれも一日に実施することで、高浜以外は帳面を作成し、作成者は重立・百姓や村

方三役、高浜のみ小商人が含まれる。また高浜では庄屋宅で検地帳へ鏡餅や雑煮を供え、筆者・算者を集めて祝う。<sup>(50)</sup>楠浦は、帳祝の後、年寄・百姓代、組頭二〇人、浦方弁指二人、二才頭六人、山番一人の入札を行うため、村法と意識されたと考ええる。下河内は、「重立もの年中相用候帳面相持家内丈帳祝」と個人宅の帳面が風俗、「年寄百姓代庄屋宅ニおゐて、御用触留帳其外村方年中相用候帳面相持」と三役宅で御用触留帳など村政関連の帳面が村法と、明確に公私を区分している。毎月朔日・一五日の氏神参詣でも、高浜は、重立・百姓が神棚へ神酒を供え、村方風俗、楠浦は、村中の惣代として庄屋・年寄が参詣し神酒を供え、入用は村割と村法にあり、全体的に高浜は村方風俗、楠浦は村法に分類している場合が多い。このように、同じ行事でも村によって参加者や費用負担などによって、認識が相違している場合がある。

## 2-4 「風土行事書上帳」作成指示の背景

この天草県の「風土行事書上帳」の作成指示の背景として、つぎの三点が考えられる。

① 庄屋の村法 八月二三日「風土行事書上帳」作成指示の前後に、村法、神祭に関する触が出ている。まず八月二二日には、「是迄庄屋共二而村法相立、右を相背候百姓共今多分之過料金等取立候族も有之哉二相聞、以之外二候」とある。<sup>(51)</sup>庄屋が定めた村法違反の百姓からの過料金取立は、御一新となり不都合な取り立てを禁止している。このような庄屋の役威については、天保三年三月、天草郡を支配した長崎代官高木栄太郎から、西国郡代塩谷大四郎正義預所へ支配替えが実施



された際の引継書にも同様の記述がある。<sup>52)</sup>

天草郡者離島二而、一体人氣区々二有之候上、先年与違所不相応  
二人高多、百姓困窮旁二而人氣惡敷治兼、村役人共役威輕候而者  
制方行届兼候趣を以、主殿頭御預所中寛政七卯年御勘定所江相同、  
大庄屋共帯刀御免、富岡町年寄・庄屋・村々庄屋とも苗字御免被  
仰付候段、先御預所役人申送其節之伺書御下知済写請書写共引渡  
有之則引渡申候

人口の多い天草郡は人の氣風が悪く治めにくいので、村役人の役威を上昇させるため、寛政七年（一七九五）より苗字帯刀御免を継承しているとあり、村法もその一環と考えられる。

② 神祭と儉約 八月二四日村における神祭について達書が通達された。<sup>53)</sup>そこには「神祭之儀者郡中安寧之為ニ候得者、村々之貧富ニ随ひ尊崇を基とし祭典可執行候、尤喧嘩口論等無之様、村役人共ニおゐて厚取締可致候」とある。神祭は郡中の安寧に必要なが、各村の経済状態に応じて祭典を実施し、喧嘩口論を取り締まる。これは神祭における華美・贅沢や、酒による村人同士の争いを禁止するための触といえる。九月一二日にも「神事祭礼等二事寄賑ひ候事抔相始、多人数集會いたし中ニハ旅人も入込候得者、間ニハ喧嘩口論等仕出し難渋請候村方有之候」とある。<sup>54)</sup>村人の他、旅人の侵入による治安悪化にも言及している。万延元年（一八六〇）九月風災、津留中の困窮のため、鎮守祭礼の芝居見物催行を取り締まっており同様の触といえる。<sup>55)</sup>

③ 知県事佐佐木高行の関与 佐佐木は六月一二日天草県へ着任したが、八月二九日天草県は長崎府へ統合、九月一九日には知県事から鎮将府判事となった。<sup>56)</sup>この間、八月二〇日に長崎府知事澤宣嘉からの達が届く。<sup>57)</sup>達には長崎は開港地で人が多く都会であり、その上「積習弊風」のため人民が困窮している、今後府藩県の政治が安定すれば、「風俗革易、窮民救助」になるとある。そのような長崎府の風俗の改革、統制の意向を受けて、天草県においても風俗調査を行ったと考えられる。またこの時期、浦上四番崩れにより、多数のキリシタンが発覚した。閏四月下旬の佐佐木の日記には、木戸孝允によって浦上の異宗徒は全国の各藩預りとなった記事や、佐佐木宛木戸の関連書状を写していることから、この一件に関与していた。<sup>58)</sup>この浦上四番崩れ、同時期の神仏分離令も含めて、天草崩れの先例を持つ天草県で神祭調査を実施した可能性もある。

### 3 明治初期の天草郡の村明細史料

#### 3-1 「肥後国天草五ヶ荘村高戸口取調」の構成

まず明治元年（一八六八）一二月に作成された「肥後国天草五ヶ荘村高戸口取調」について、その構成と記述内容について述べる。<sup>59)</sup>本史料は、最初の丁の件名簿は長崎県の野紙に「庶務課庶務係事務簿」とあり、後の長崎県でまとめられたと考えられる。「戸籍之部」とあり、①「肥後国天草郡社寺戸数人口取調帳」②「全郡村々高戸数人口其外取調帳」③「全郡国照寺・東向寺領村々全上」④「全国八代郡五ヶ庄

全上」の四件の文書が記され編綴されている。

①「肥後国天草郡社寺戸数人口取調帳」には、六三村の各村別における寺社の家数・人数が記される。合計社家四七軒、人数男七七人、寺院九四軒、人数五七九人、男四六三人・女一一六人とある。神社は男ばかりで、神子など他地域で社家に含まれるものが一般の村人になつてゐる可能性も考えられる。寺院の家数は二倍だが、人数は七・五倍ほどの差があり、家族が含まれるかどうか数値の差となつてゐる。

つぎの②「天草郡村々高戸数人口其外取調帳」については、今回対象とする村明細史料であるため後述する。③「肥後国天草郡国照寺・東向寺領村々高戸数人口其外取調帳」は、国照寺領白木尾・年柄村、東向寺領本村の村明細で、合計高二四七・三四五八石、家数一八〇軒、人数九七五人、男四七四人・女五〇一人である。以上の①③は、寺社の家数・人数、寺領の村が明確に記載されており、他の天草郡の明細史料を分析する際の参考となる。

最後の④「肥後国八代郡五ヶ庄高人口戸数其外取調帳」は、近世後期以来同じ西国郡代支配であつた八代郡五ヶ庄の久連子・椎原・樅木・葉木・仁田尾村の五村の村明細が記される。

### 3-2 「天草郡村々高戸数人口其外取調帳」の記述内容

②「天草郡村々高戸数人口其外取調帳」は、天草郡各村の一町八五村の明細帳である。最終丁に、辰一二月福田與が「右者肥後国天草郡村々高戸数人口其外取調帳」と記している。福田與は、明治元年九月

二二日から明治二年一〇月まで、佐佐木知県事の後に長崎府郡宰専任として天草郡を管轄しており、作成年代は明治元年一二月とする。<sup>60)</sup>

この文書の調査に関して、一〇月二二日政府の会計官より長崎府、福岡陣屋を経由してつぎのような指示が出された。<sup>61)</sup>

一人口 何程

一戸数 何軒

一惣高 何程

内 何程 何石

何程 何石

但旧幕麾下領知いまた御処置無之、当分支配いたし候分別二可認

一地方広狭 東西何里・南北何里

是ハ他支配他領入交り一闔無之ハ大方地図を以府県江之道程を記し、一紙上ニ大凡見渡便セシム

右支配限至急御取調可差出候事

十月 会計官

長崎府

別紙之通被仰出候間、村高・家数・人数男女并村々東西何程・南北何程、村方々茂木村迄海陸何程与申儀取調、来月五日迄組限壹帳ニいたし可差出、且家数・人数之儀ハ村々社人寺院与も打込可取調候、此廻状刻付を以早々順達留可相返もの也

辰十月廿二日 福岡陣屋朱印

本文には、村の人口・戸数・村高・地方広狭などを調査し提出とあり、また但書には、旧幕府支配下で未処理の地域は別記すると、当時の政治情勢が判明する。その後、一月三日には、この調査では社寺院分は別帳とする指示が出ており、これが①「肥後国天草郡社寺戸数人口取調帳」である。<sup>62</sup>

この帳の内容と記述内容を比較するため、つぎの高浜村の事例で各項目を概観する。

高六百三拾九石九斗七合 高浜村

一家数六百六拾五軒

一人数三千七百三拾式人内 男千七百七拾七人  
女千九百五拾五人

一東西式里拾八町

南北式里拾町

一長崎裁判所迄 海路茂木村迄拾七里  
同村今陸路式里五町

一福岡陣屋迄 海路六里半  
陸路五里拾八町

いずれも触の指示通りであり、前半に村高・家数・人数・男女数が記される。後半に村の東西・南北の距離、この数値は各方向における最長部分であり正確ではないと考えられる。長崎裁判所の距離は、郡内すべて茂木村（現長崎市）への海路と、茂木から長崎への陸路が記

される。これも福岡陣屋の指示通りである。海路の距離は、福岡周辺の七里から宮野河内村の二七里まで幅広い。長崎裁判所は、慶応四年（一八六八）二月一日～五月四日に設置された明治政府の地方行政機関であり、作成月の一二月段階では時期的には長崎府となる。

福岡陣屋までの距離は陸路と海路があり、両方記される村、一方のみの村がある。海路は五一町村、志岐村の二五町から姫浦村一八里、陸路は全町村に記され、福岡町の三町から登立村の一九里一八町まで幅がある。天草下島北端の福岡への交通路は、海路・陸路ともに最大距離は一八・一九里と差はなく、上島東端の村が遠距離であった。ただいずれの距離も、特に海路は実測したものではなく、船頭の認識距離などをもとに記入していると思われる。最後に合計として、高二万五二五九・七六一九石、家数二万四八九七軒、人数一五万五九七四人、男七万七八四四人・女七万八一三〇人とある。

### 3-3 「肥後国天草八代郡村鑑帳」の作成時期

つぎの「肥後国天草郡八代郡村鑑帳」は、本文に作成年代はなく明治二年と目録に記される。<sup>63</sup>天草郡一町八七村と八代郡五ヶ庄の五村、計九三町村の明細帳である。村の記述内容は、同じく高浜村の事例紹介するが、項目の詳細は後述する。

万治二亥年鈴木伊兵衛 検地 私領入会なし  
文久三亥年屋代増之助  
一高六百三拾九石九斗七合 高浜村

田六拾三町八反八畝廿叁分 石盛上十八、中十四、下十一、

下々七、三下五四、見付四

内 内式拾町步余 両毛作

畑拾九町七反七畝拾五分 石盛上十、中七五、下六、下々三、

三下三五、見付二、林一五

一 此村用水懸、年により少々旱損有

一 小物成少々有

一家数六百六拾五軒 人数 男千七百七拾七人 牛なし

女千九百五拾五人 馬七百五拾壹疋

一 農業の間稼に、男は薪海草ふのりの類を取并砥石を売出、女ハ木綿織

一 草刈場居村之内にて刈、他村入会なし

一 御林なし、百姓持林少宛所々に有、雜木立反別不知

一 小川有、歩行渡

一 米津出し、此村浜分積、富岡蔵所迄海路五里

一 海漁少々あり

一 村中に大さ成普請所以樋共なし

一 此村里及海辺困窮の村也

一 船数五拾参艘

高浜村上田家文書には、この調査の提出文書と思われる「様子大概書」<sup>64</sup>が現存する。この文書には高反別・農閑稼・草刈場・百姓持林・米津出・普請所などの記述と、家数・人数・牛馬は項目のみで数字は

空欄で、順番と内容はほぼ「肥後国天草郡八代郡村鑑帳」と同じである。端裏には「右天保八酉年御取調ニ相成候長崎御代官高木氏の御帳分写置候、心得之為也、慶応辰閏四月」とあり、天保八年（一八三七）に作成された文書から必要情報を抜き出し、慶応四年閏四月に参照したと思われる。<sup>65</sup>そのため空欄は、慶応四年段階での数値を確定して記入する予定だった。先述したように閏四月八日には、全国触として、村高帳・昨年の取箇帳・郷帳、村鑑帳の提出指示が出ており、これに該当する。<sup>66</sup>

ただ「肥後国天草郡八代郡村鑑帳」の本文中には、長崎県時代の「明治二年検地福田奥」と記載がある。先述のように福田奥は、明治元年九月二日から明治二年一〇月まで長崎府郡宰専任として天草郡を管轄した。これらをまとめると「肥後国天草郡八代郡村鑑帳」は、富岡県時代の慶応四年閏四月に指示された村鑑帳を、村が「様子大概書」として直近の天保八年を参照し現段階の数値を追加し提出、その後明治二年検地の成果も含めて、同年中に完成したと推測できる。

### 3-4 「肥後国天草郡八代郡村鑑帳」の記述内容

「肥後国天草郡八代郡村鑑帳」は、「天草郡村々高戸数人口其外取調帳」に比べて項目が多く詳細である。最初に石高・田畑面積・石盛が記される。この石高は、万治二年（一六五九）鈴木重成代官、文久三年（一八六三）屋代増之助代官の二回の検地高であり、この場合、文久三年の高を採用している。多くは文久三年であるが、この他に文政一一年（一八二八）高木作右衛門忠任期が四村、慶応四年佐佐木高行期が一村、明治二年福田奥期が三村の三期が確認できる。





## おわりに

本稿では三章にわたって、天草郡における、慶応四年から明治二年までの近世近代移行期に焦点をあてて、この時期の村明細史料の編纂過程と把握された地域情報について分析した。

まず1では、木山家文書「御用触写帳」の触を中心に、京都との比較や村方文書から、支配担当者の文書行政の復旧と村の地域情報の調査指示をみてきた。まず慶応三年（一八六七）の郡会所焼き払いにより、これまで蓄積された文書が焼失した。その上、西国郡代支配の消滅後、慶応四年正月から浪士追討のため来島した薩摩藩が実効支配し、つぎに異国船警衛に出動していた熊本藩が交代し、閏四月富岡県、六月天草県、そして八月には長崎府に統合されるなど、支配がめまぐるしく変わり、新しい支配担当者が来島した。支配のために、まず焼失した文書、特に年貢収納期であったため、村々に下付された諸割賦請取書を集め復旧を急いだ。続いて検地帳などの租税や田畑の文書の提出を指示した。これらは、正常に西国郡代から引き継がれば、本来あるべき文書であり、郡会所の焼き払いによって蒙った損失であった。

三月後半以降、村に蓄積された文書の写の提出ではなく、新たな調査が命じられていく。特に高齢者や孤独・孝子などは頻繁に登場しており、同時期に府になった京都と比較すると、同内容の触が出ており、同様の政策が実施された。また新政府から全国に向けて、村高帳・郷帳・村鑑帳や神社由緒書などの提出も指示されていた。

2では、全国統一的な流れとは違った、おそらく天草郡限定の調査

指示である「風土行事書上帳」の作成過程をあきらかにした。この文書は、近世の村明細帳や支配担当者の調査のなかで、最も村の地域情報を把握したもので、神祭仕様・村方風俗・村法項目など長文の文章形式が特徴といえる。これらの情報は、村において追や組別に収集され、他村の情報を参照し、内容を修正追加して作り上げられた。ただ調査項目のみの指示であったため、各村の神祭・風俗・村法の記述や、同じ行事でも村によって参加者や費用負担などによって、認識が相違している場合があった。これは民俗や風俗・習慣の郡全体の差異なども判明する貴重な資料である。また作成指示の背景には、①庄屋の理不尽な村法の抑制、②華美や喧嘩の要因となる神祭の実態調査、③浦上四番崩の取り締まりや風俗革易などに関与した知県事佐佐木高行の存在があったと推測できる。

3では、明治初期の天草郡の村明細史料「肥後国天草五ヶ荘村高戸口取調」「肥後国天草郡八代郡村鑑帳」について、作成過程と記述内容の分析を行った。いずれも郡全体の各村の地域情報が揃った文書で、長崎府時代以降の、おそらく会計官や国の指示があったと考えられる。特に、明治二年「肥後国天草八代郡村鑑帳」は、「肥後国天草五ヶ荘村高戸口取調」に比べて、項目の数も内容も増加している。ただ内容は、慶応四年閏四月の情報を基にしている村があることから、完全に当時の地域情報を把握できなかった。そして近世の村明細帳の項目とほぼ同じであった。

最後に以上の分析からまとめると、大政奉還以降の政治的混乱のなかで、行政の中心であった郡会所が焼き払われ、西国郡代も支配を放

棄し、郡政の文書が正常に引き継がれず、天草郡は一からの復旧となった。その上短期間に支配担当者が交代することにより、行政が不安定となり、他地域に比べても現状回復には時間と労力が必要であった。そのため新政府発だけではなく、天草郡独自の指示も含めて、様々な調査が行われた。そのなかで、当時の現状を改善すべく天草県と佐佐木知藩事は、これまでの村明細帳より詳細な「風土行事書上帳」の作成を指示し、地域情報の収集に努めた。しかし詳細な内容の調査には時間がかかり、さらに直後に長崎府へ統合され佐佐木が異動したこともあり、郡全体を集成した文書は未完成であったと思われる。その後行政が安定するにつれて、全村の明細史料を集成することが可能となり、「肥後国天草五ヶ荘村高戸口取調」のように郡全体を一冊にまとめた文書が作られる。しかし内容は「風土行事書上帳」のような独自性はなく、近世の村明細帳と同形式となった。明治初期の天草郡では、一時的に地域に密着した詳細な地域情報の収集が行われたが、全国的な流れのなかで平準化され、近世へ回帰したといえる。

今後の課題として、村明細史料の調査に対して幕末期の状況がどのように影響しているのか、また貴重な民俗資料といえる各村の「風土行事書上帳」の実態分析、近世の村明細史料から近代の郡村誌や統計資料への連続と断絶などをあきらかにしていきたい。

追記 史料の閲覧に際して上田陶石合資会社、岩下邦明所長、田中光徳氏には御高配を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。なお本稿は二〇一七年度、総合地球環境研究所実践FS（機関連携型）「ヒト・

自然・地域ネットワークの再構築…ナラティブとアクションリサーチをつなぐ数理地理モデリング」（研究代表者村山聡）の研究成果の一部である。

（二〇一七年九月二十九日受理）  
（ひがし のはる 文学部歴史学科准教授）

- (1) 東昇『近世の村と地域情報』吉川弘文館、二〇一六年。
- (2) 近世の天草郡の村明細帳は、①天草古文書会『天草郡村々明細帳』上中下、一九八八～一九九三年、②有明町教育委員会『栖本組村々明細帳ほか』一九九六年と、郡内の一部の村が刊行されている。
- (3) 東昇・村山聡『近世・近代対馬における地誌と村明細史料―編纂過程の比較史』『第六〇回歴史地理学会大会発表資料集』二〇一七年六月一八七日。
- (4) 野村兼太郎『村明細帳の研究』有斐閣、一九四九年。
- (5) 宮本又郎『村明細帳の数量分析試論―現・大阪府豊中市域諸村をケースとして』『経済志林』七三（四）、法政大学経済学会、二〇〇六年、二二一～二三四頁。
- (6) 渡邊英明『村明細帳を用いた近世武蔵国における市場網の分析』『人文地理学会大会研究発表要旨』二〇〇七年、一〇七頁。
- (7) 溝口常俊『隠岐における田・畑作と地域像』『尾張における田畑の景観と開発』いづれも『日本近世・近代の畑作地域史研究』名古屋大学出版会、二〇〇二年、三二七～三八一頁。新修名古屋市史第三専門部会編『江戸期なごやアトラス 絵図・分布図からの発想』（新修名古屋市史報告書四）名古屋市総務局、一九八九年。
- (8) 白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』思文閣出版、二〇〇四年。
- (9) 鈴木一哉『領主が替わるとき』朝日百科『日本の歴史』別冊『家・村・領主』朝日新聞社、一九九四年、六〇～六一頁。

- (10) 中村正夫「天草の村明細帳」『九州文化史研究所紀要』一二、一九六七年、一八九～二八一頁。
- (11) 同人会まじみ『あまくさ雑記』五、一九九六年、四四～六八頁。
- (12) 熊本県郷土誌叢刊『天草郡史料』一、一九一三年、四四一～五七四頁。
- (13) 松田唯雄『天草近代年譜』一九四七年、六九三、六九七頁。
- (14) 天明八～明治三年（一七八八～一八七〇）分が現存し、一部欠年を除いて翻刻刊行されている。本渡市教育委員会『天領天草大庄屋木山家文書御用触写帳』（以下「御用触写帳」と略す）一～七、一九九七～二〇〇二年。
- (15) 「御用触写帳」七、二五七頁。
- (16) 「御用触写帳」七、二五八頁。
- (17) 「御用触写帳」七、二五五頁。
- (18) 「御用触写帳」七、二六二頁。
- (19) 大平祐一『目安箱の研究』創文社、二〇〇三年、二八三～二八六頁。
- (20) 「御用触写帳」七、一九八～一九九頁。
- (21) 「御用触写帳」七、二〇〇頁。
- (22) 「御用触写帳」七、二三三頁。
- (23) 「御用触写帳」七、二二二～二三三頁。
- (24) 「御用触写帳」七、二二四頁。
- (25) 「御用触写帳」七、二二四、二二七頁。
- (26) 「御用触写帳」七、二二八～二二九頁。
- (27) 「御用触写帳」七、二三四頁、二五五～二五六頁。
- (28) 「御用触写帳」七、二七六頁、二八五～二八六頁。
- (29) 「御用触写帳」七、三〇九～三一〇頁。
- (30) 「御用触写帳」七、二七六頁。
- (31) 「御用触写帳」二、四三六頁。
- (32) 京都府立総合資料館編『京都府百年の歴史』四社会編、一九七一年三八～四〇頁。
- (33) 「御用触写帳」七、二四〇頁。
- (34) 「御用触写帳」七、二四六頁。
- (35) 「御用触写帳」七、二四四頁。
- (36) 中村正夫「天草の村明細帳」二七〇～二七二頁。
- (37) 佐佐木高行著、東京大学史料編纂所編『保古飛呂比佐佐木高行日記』三、東京大学出版会、一九七二年、二八二、二九〇、二九六頁。
- (38) 「御用触写帳」七、二五四頁。
- (39) 「御用触写帳」七、二八五頁。
- (40) 上田家文書四一四二（天草市上田陶石合資会社所蔵）。
- (41) 高浜（上田家文書）、楠浦（宗像家文書）、赤崎（北野家文書）、福連木（尾上家文書）、本泉（倉田家文書）、いずれも翻刻は天草古文書会『天草郡村々明細帳』、赤崎については中村正夫「天草の村明細帳」、高浜については『近世天草風俗資料集』熊本県立大学日本語日本文学研究室、二〇一一年も参照。
- (42) 「御用触写帳」七、二九二頁。
- (43) 上田家文書四一九、四三。
- (44) 上田家文書四一四三、『近世天草風俗資料集』一八七頁。
- (45) 上田家文書一〇一、一六。
- (46) 上田家文書四一四四。
- (47) 上田家文書追四一。
- (48) 上田家文書一〇一、一七。
- (49) 東昇「地域情報の記録と情報化―日記・文書―」『近世の村と地域情報』四九～五〇頁。
- (50) 同様の検地帳を祭る事例として、武蔵国大野村の事例を紹介している、富善一敏「近世日本のアーカイブズ」『アーカイブズ研究』七、二〇〇七年、三六頁、同「検地帳所持・引継争論と近世村落」『近世村方文書』の管理と筆耕―民間文書社会の担い手』校倉書房、二〇一七年、一四七頁。
- (51) 「御用触写帳」七、二九〇～二九二頁。
- (52) 『肥後国天草郡八代郡地方演説書』天草古文書会、一九八一年、三二頁。
- (53) 「御用触写帳」七、二九二頁。

- (54) 「御用触写帳」七、二九九頁。
- (55) 「御用触写帳」六、二一二頁。
- (56) 『保古飛呂比 佐佐木高行日記』三、三四一頁。
- (57) 『保古飛呂比 佐佐木高行日記』三、三二五頁。
- (58) 『保古飛呂比 佐佐木高行日記』三、三七九～三八〇頁。
- (59) 長崎歴史文化博物館所蔵、一四―一三二―二。
- (60) 『天草近代年譜』六六五、六八〇頁。
- (61) 「御用触写帳」七、三〇八頁。
- (62) 「御用触写帳」七、三一―頁。
- (63) 長崎歴史文化博物館所蔵、一四―四一二―四。
- (64) 上田家文書追四―四。
- (65) 天保九年諸国巡見使によるものと考えられ、天保九年四月高浜村「明細帳」（上田家文書四―一九）が現存している。
- (66) 「御用触写帳」七、二四六頁。